

*今月号は私が担当しました。



営農振興課 営農経済渉外係 吉田 典子

ホウレンソウのべと病について

令和3年度産のホウレンソウでは、べと病が多発し、防除に苦戦された方も多いと思います。そこで今回は、ホウレンソウの重要病害である、べと病の対策についてご紹介します。

対策するうえで最も重要なのは、総合防除を行う事です。品種の選定、薬剤散布、適切な栽培管理を行う事で病気が出にくい、また出ても軽症で治まるような管理を心がけましょう。

① 品種の選定

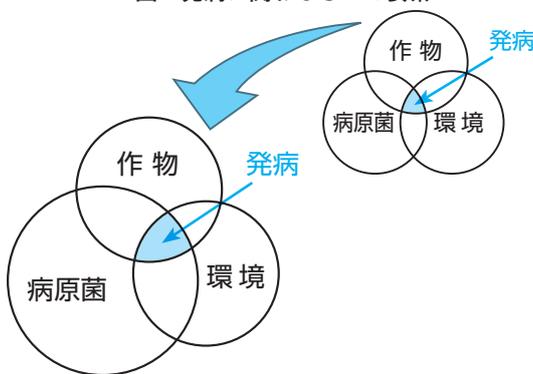
皆さんの品種選定基準は何でしょうか。栽培時期・収量性・作業性・そしてべと病耐病性が挙げられるのではないのでしょうか。ここではべと病のレースと耐病性品

種についてご紹介します。

レースとは、病原性の異なる系統のことで、番号でその型を表現しています。べと病は新しいレースが発生しやすい病害で、令和5年4月現在、レース1〜19が知られています。このうち17〜19に対する抵抗性品種はここ2年のうちに発売されています。

ホウレンソウのべと病抵抗性は、抵抗性を示すレースに対して、レースの番号を付けて抵抗性を表記しています。既存の品種でも、新しい病菌に対して抵抗性を持つものもあり、レース表記が増える場合もあります。この表記は、種子の袋や種苗メーカーのホームページに記載されています。近年、新しいレースが増えたこ

図 発病に関わる3つの要素



近年のホウレンソウべと病発病イメージ

病原菌による要素が増え、発病リスクが大きくなっている。

とによる、他の要素との発病関係を図に示しました。植物は、植物体・病原菌・環境の3つの要因がそろって初めて発病します。

② 病原菌防除

発病後の防除は難しいので、べと病抵抗性の有無に関わらず、予防的な農薬散布を行います。病斑が見られる3週間前にはすでに感染しています。平均気温8〜18℃で発病が多くなりますが、近年11月になっても温暖なので露地でも被覆前に薬剤散布を行います。圃場を良く観察し、発病株の早期発見と除去、また地上部残渣を圃場外に持ち出し、菌密度を下げることも重要です。

※登録農薬は表のとおりです。

③ 環境

多湿で発病が多くなるので、トンネルやハウスを適宜換気したり、深耕や明渠を設置して、排水性の良い圃場を作ります。また、豪雨後に地表面が硬化すると、根が窒息して生育不良になるので、条間の中耕や根張り促進を促す液肥を灌注するなど、丈夫な株に育てることも、病気にかかりにくくするには有効です。

多肥や密植による過繁茂や軟弱条件にしない管理も重要です。前

作の残肥を考慮し、多肥に注意しましょう。

今年度どのレースが流行し、いつ台風やゲリラ豪雨の被害を受けるか分かりません。総合的な防除を心がけ、収量の確保を目指しましょう。

表 ベと病登録農薬

作用機構	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数
4 (A11)	ユニフォーム粒剤	9kg / 10a	播種前	1回
40 (H5)	フェスティバル水和剤	2,000倍	収穫前日	3回
21 (C4)	ランマンフロアブル	2,000倍	収穫3日前	3回
	ライメイフロアブル	2,000 ~ 4,000倍	収穫7日前	2回
U17 (U)	ピシロックフロアブル	1,000倍	収穫前日	2回